

聖書：ルカ 21：20～28

説教題：頭を上を上げよ

日時：2012年11月25日

エルサレムの宮の素晴らしさに感嘆の声を上げた人々に、イエス様は「あなたがたのしているこれらの石が崩される日が来る！」と語られました。そして「エルサレムの宮の崩壊」の出来事と合わせて「世の終わり」について語り始めました。前回も申し上げた通り、高い山々を遠くに眺めた時、それらの山々の間には相当な距離の隔たりがあるだろうにもかかわらず、まるですぐそばで重なり合っているように見える場合があります。イエス様はそのように、まずこの後の歴史の一つのピークであるエルサレム神殿の崩壊について語りますが、同時にその背後に重なって見える「この世の終わり」についても一緒に語っておられるのです。今日見る前半（20～24節）は主にエルサレム神殿崩壊について、後半（25～28節）は主にこの世の終わりについて語られていますが、私たちはこれら二つを独立した出来事として見るのではなく、互いに重なり合っているものと見るべきです。言い換えれば、前半はエルサレムの滅亡に関することだから今の私たちには関係ないと思うべきではなく、それも今日の私たちに対するメッセージを持つものとして見て行く必要があるということです。

まず前半の20～24節は、エルサレム滅亡に関する預言です。20節と21節：「しかし、エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、そのときには、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ちのきなさい。いなかにいる者たちは、都にはいつてはいけません。」エルサレムの都は紀元70年に、ティトゥスに指揮されたローマ軍に包囲され、陥落しました。その時、多くのユダヤ人はこの町に逃げ込みました。聖なる神の都に逃げ込めば、その町が、また神殿が、自分たちを守ってくれると信じたのでしょう。その結果、当時の歴史書には死者110万人、捕虜として60万人が連れ去られたとあります。当時のエルサレムの人口は70万人だったと言いますから、いかに多くの人々がこの町の中に逃げ込んだか、ということになります。

一方、イエス様の言葉を信じたクリスチャンは山へ逃げたようです。エルサレムの町自体、小高い丘の上にはありましたが、ここで言う「山」とはもっと高い山、ヨルダン川東側のペレヤ地方を意味したようです。しかし場所はどこであっても、イエス様の要点は、エルサレムの都から離れて、人里離れたさみしい所へ逃げよ、ということだったでしょう。目に見える外側の立派さに自分の救いと安全を見いだそうとする誤った信頼を自分の中で断ち切って行動しなければならない、ということでしょう。

さて、エルサレムの都はなぜ、このような滅亡という悲惨な運命をたどらなければならないのでしょうか。それは一言で言って、神のさばきゆえです。23 節に「この民に御怒りが臨むからです。」とあります。また 22 節に「これは、書かれているすべてのことが成就する報復の日だからです。」ともあります。旧約聖書には、神に従わず、罪を犯し続けるなら、必ずさばきが臨むという警告が多く箇所で語られています。申命記 28 章 15 節：「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、私が、きょう、命じる主のすべての命令とおきてとを守り行なわないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたはのろわれる。」 列王記 9 章 6 節：「もし、あなたがたとあなたがたの子孫が、わたしにそむいて従わず、あなたがたに授けたわたしの命令とわたしのおきてとを守らず、行ってほかの神々に仕え、これを拝むなら、わたしが彼らに与えた地の面から、イスラエルを断ち、わたしがわたしの名のために聖別した宮を、わたしの前から投げ捨てよう。・・この宮も廃墟となり、そのそばを通り過ぎる者はみな、驚いて、ささやき、『なぜ、主はこの地とこの宮とに、このような仕打ちをされたのだろう。』と言うであろう。」そしてイエス様もこれまでエルサレムはそのさばきを免れないことを繰り返し語って来られました。13 章 34～35 にもその言葉がありました。19 章 42 節：「やがておまえの敵が、おまえに対し壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。」イエス様は今日の箇所です。「その日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。」と言われます。本来、子供を宿し、産み育てることは祝福であり、喜びなのに、それが逆に悲しみと嘆きの原因になる。さらに 24 節：「人々は、剣の刃に倒れ、捕虜となつてあらゆる国に連れて行かれ、異邦人の時の終わるまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされます。」

ここに示されていることは、神のあわれみと寛容はいつまでもあるのではない、ということです。神は無制限に忍耐される方ではない。神は侮られないお方です。ですから私たちはこれを、今の私たちにはあまり関係のない過去の出来事と見なすことはできません。これは後に来る最後のさばきに重なるものであり、やがて来るものの前触れなのです。ですから私たちは最後のさばきに先立って起こったこの一つのピークの事件から学ばなくてはなりません。すなわち私たちも悔い改めないなら、最後にはこうなる。同じ悲惨を刈り取らないように、神のあわれみと忍耐がある間に、私たちは真剣にこの教訓を自分に生かさなくてはならないのです。

さて 25 節からはいよいよこの世界の終わりの日についてです。ここには太陽、月、星の動きに異常なしるしが現われるとか、天の万象が揺り動かされるとあります。私たちとしては「そんなことは本当に起こり得るだろうか。規則性を持って動いている

この宇宙や世界がそのように混乱することは考えにくい。」と思いやすい。しかし私たちの想像を超える出来事はいくらでも起こります。イエス様が十字架にかかれた時、太陽は光を失い、全地は暗くなりました。ノアの洪水もそうです。また前回の 8～11 節には、偽キリスト、戦争や暴動などと並んで、飢饉や大地震、天からのすさまじい前兆、などと述べられていました。今年の東日本大震災も、私たちが見た津波の映像は目を疑うようなものでした。何十年も何百年もかけて築き上げられた街と人々の生活が一瞬にして失われる様子を見て、ただ呆然とするばかりでした。そのレベルをはるかに超える出来事が今後起こらない、とは誰も断言できません。また 25 節には「諸国の民があれどよめくために不安に陥って悩み」とあります。今の私たちの日常生活が、その根本からゆり動かされるような状況が生じるのです。こうした大混乱の中で、人々は気を失い、絶望します。26 節：「人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。」

こうした状況のただ中で、ついにイエス様の再臨が起こります。27 節：「そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗ってくるのを見るのです。」 イエス様は 1 回目はしもべのかたちを取って低い姿で来られましたが、2 回目は勝利の主として、輝かしい栄光の内に来られます。ここに「雲に乗って来る」とありますが、「雲」は聖書で神の臨在と栄光を象徴するものとして用いられています。主は荒野の民を昼は「雲」の柱、夜は火の柱によって導かれました。またモーセがシナイ山で十戒を授かる時、その山の頂には「密雲」があり、全山は激しくけぶり、震えました。また幕屋が完成した時、あるいはソロモンが神殿を奉献した時、栄光の「雲」がその宮に満ちました。新約でも、イエス様が山上で栄光の御姿に変貌し、モーセ、エリヤと語り合った時も、3 人は「雲」に包まれて見えなくなりました。また復活して昇天される時も、イエス様は「雲」に包まれて昇って行かれました。そのような神の栄光の現われである「雲」、主の民が常に恐れ、またあこがれたあの「雲」に乗って主は現れるのです。その栄光の日はどんなに素晴らしい日となるでしょう。私たちはただ一言で「栄光」と言ってしまうと、聖書の色々な箇所から思い巡らしてみるべきです。モーセはシナイ山で主にお会いした時、その光景があまりにも恐ろしく「私は恐れて、震える。」と言いました。また先ほど述べたペテロ、ヨハネ、ヤコブは、主が山上で変貌した時、その御顔がいなずまのように光り輝き、その着物が世のさらし屋ではとてもできない白さに輝くのを見ました。また復活の朝、墓を守っていた番兵は主の使いを見た時、その顔がいなずまのように輝き、その衣が雪のように白いのを見て、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになりました。これらは主の輝かしい栄光の片鱗であり、一部に過ぎません。私たちはやがての日に、初めて主のありのままの姿を見るのです。やがての御国でともしびの光も太陽の光もいらない、と言われている主

の輝き、この方の十分な栄光を初めてすべての人が見ることになるのです。

このような最後の日に向かって、私たちはどのように歩むべきでしょうか。28節：「これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすぐにし、頭を上を上げなさい。贖いが近づいたのです。」ここに世の人々と全く異なるクリスチャンの姿が示されています。人々がみな恐ろしさの余り、気を失っている中、クリスチャンは逆に頭を上を上げる。なぜそうなのでしょう。それは贖いが近づいたからです。

前回見たように、世の終わりの様々な前兆は、次の世が来るために必要なプロセスです。人間が罪を犯したことによって呪いをかぶったこの世界は、そのままで天国に変わることはできません。2ペテロ3章にあるように、天は燃えて崩れ、地と地の色々なわがは焼き尽くされます。そのようなさばきと聖めのプロセスを通して、神は新しい天と新しい地を出現させて下さいます。そのように今の世界が過ぎ去り、新しい秩序に取って代わるための言うならば「産みの痛み」、「陣痛」のような状態が生じることは当然のことでしょう。前回の9節でイエス様が言われたように、それは初めに必ず起こることなのです。いや、それは起きなければならないことなのです。ですからその事柄が起きていることの内に、私たちはいよいよやがての救いの日が近いと知るのであります。そのやがての世界が来たなら、私たちは罪と世のサタンの支配から完全に解放されます。また罪の呪いからも完全に解放されます。従って病気もなければ、悲しみ、痛み、叫びが一切なく、死ももはやない。そして私たちはついにイエス様のありのままの姿、その美しい姿を目の前で見ることになります。私たち自身も復活の体を与えられ、イエス様と同じ栄光の体を頂き、イエス様に完全に似た者へ変えられている自分を発見します。そして神の全き光に照らされる永遠の生活へと入って行くのです。

ここに信仰者と世の人々との大きな違いがあります。世の人々が世の終わりに向かってどんどん下を向く状況の中で、反対に益々頭を上を上げるのがクリスチャンなのです。もちろん私たちは周りの人々が痛みの中にある時、その人々のことを思っている助けをします。気を失っている人々のそばに共にいて、その人々を支える働きにも心と体を用います。しかし私たちはその人々と一緒になって絶望することをしない。本当に不思議であり、信じがたいことですが、私たちはそのただ中で益々希望を大きく持つのです。そしていよいよからだを起こし、頭を上を上げるのです。そうできるのは、イエス様が十字架と復活のみわざを通して、私たちの救いに必要なことを完全に成し遂げてくださったからです。そしてどんな混乱に取り囲まれようと、私を守り、私から髪の毛一筋も失われないようにしてくださるからです。そして私たちを約束の完全な贖いの御国に入れてくださるからであり、そのことを私たちは心から信じ、待ち望んでいるからなのです。